

## 津田玄仙の理想とする漢方

### 医学教育

平馬直樹

漢方医学は、現代では希少となつてしまつた実用性を失つていない日本の伝統技術のひとつである。近年漢方医学の有用性が再注目され、徐々に現代医療の中に一定の足場を築きつつある気運が見られる。漢方医学の需要の増大とともに、この医学を如何に学び如何に伝えるかということが漢方医学を担う者にとって大きな課題となつている。中国においては伝統医学である中医学は、一九五〇年代から各地に設立された大学同等の教育機関である中医学院において教育・研修が行なわれている。我国においても既に大医学部に漢方医学の講座を設けた所が現われ、漢方医学の教育伝授の努力が始められている。

筆者は漢方を主体とする医療を担当する者として、この医学の教育研修に関心を払わずにはおられない。今回は筆

者が共感を覚える所の多い江戸時代後期の医家津田玄仙の医学校設立趣意書とも言える『勸学治体』を紹介し、その今日的意義も考えてみたい。

津田玄仙（一七三七—一八〇九）は上総馬籠（現・木更津市郊外）の一地方医であつた。古方家の原南陽や和田東郭と書簡による親交があつたというが、その医説の多くは饗庭道庵から継承したものと考えられ、一応後世派医学の影響の強い臨床医といえるだろう。彼の生きた時代は、山脇東洋・吉益東洞の門弟によつて全国に古方派医学が拡がり、一方江戸を中心に蘭学の興起した時期である。古方家や蘭学者とは異なり、玄仙は陰陽説・臟腑論などの伝統理論を否定する立場をとらないが、彼の書『療治茶談』には自らの経験を信頼して臨床的観察に則つて物事を判断するという姿勢が窺われ、この時代の空気を感じさせる。

『勸学治体』は天正八年（一七八八）自序、本文は二二丁の小冊子。執筆の動機・講堂の創建評議・学生の募集・学寮の授業次第・先生の課業等が論じられている。以下に紹介する。

執筆の動機。玄仙は当時の医者の上の杜撰なこと、治

療の拙いことを医の弊風と歎き、日本に儒学校はあつても医塾が少くないことを建議の動機としている。次に学生は「落魄たるが気稟負誠にして学問を嗜み」医者として有望な人材を選別して奨学金を与える。年齢は一五〜三〇歳に限り、修学年限は三年間とする。

学寮の授業は、経伎寮・方伎寮・本草寮・儒書寮の四寮で行なう。このうち方伎寮に重点を置く。経伎寮では『素問』『靈樞』から治療に必要な要論を、出典を明らかにして抄出し平易に解説する。脈・経絡・鍼灸・運氣も兼職として簡潔に教える。先後天・五行・二火等の論は附会すべきでない。方伎寮では①『傷寒論』②『金匱要略』③『脾胃論』・『弁惑論』（李東垣）④『医学入門』（李挺）⑤『婦人良方』（陳自明）⑥『医方集解』（汪昂）⑦『切要方義』（上田山沢）⑧『医鏡』（王肯堂）⑨『痘科鍵』（朱巽）の九部の書をテキストに定め、丁寧綿密に理義を説き暗誦するほどに指南する。先ず①②を挙げてゐるのは傷寒金匱が尊ばれるようになった時節を反映しているが、指南の方針として本文だけを素読させる、講師は才芸に誇って鑿説空論を附会してはならないと述べ、その学習態度は古方家とは一線

を画している。他書は明代の実用書が多い。本草寮では『本草綱目』を会読させる。参考書に『本草備用』『和漢三才図会』『物類品隲』を指定している。儒書寮では儒学薫陶の益によって人倫を厚くし医学の自分に帰する草料とするのを目的する。孝経四書五経等を他寮のカリキュラムに支障のないように教授する。

医生は素読の後に方伎寮の指定医書を毎日朝昼晩の三回、威儀を正して唱和する。また「処方業」「抄書業」を行なう。処方業とは薬方の運用を初学から慣れさせるため、あらかじめ治療に必要な良方二三百方を選び口訣の辞を作っておき一日に二三方を教授してゆく。すべて暗誦したら、口訣の字句を解説し綿密に理論づけをするというもの。抄書の業とは一小冊子を作りあらかじめ病門を分ち、平素座右に置き読書の毎に要語奇方を冊子に抜書するというもの。将来治療のあいまに読み返し参考とし、その体験も書き加える。一生続ければ必ず医の道に通達する。これは玄仙自身が行なってきた学習法であるとして効果の高いことを自負している。

以上紹介したように、玄仙の重視したものは臨床に密着

した知識の伝授である。儒学・文芸偏重の教育を排除するとともに、臨床上有用であるか否かの観点で伝統理論の取捨選択を行なう。旧説に無条件に盲従することを戒め、初学のうちから衆論の是非を取捨する目を養うことを重視している。このような玄仙の教育研修方針は今なお傾聴すべき点が多いと考える。

(北里研究所附属東洋医学総合研究所)

## 水野皓山と山本読書室

遠藤 正治

蘭山門下の京都の本草家としては、百々俊道・平井宗七郎・山科享庵・上田元孝・福井棗園・水野皓山・山本亡羊・内藤剛甫・物部寿斎らの名がよく知られているが、尾張嘗百社のグループに比しても、これらの人々の事跡はよく解明されているとはいえない。とくに水野皓山の場合は、著書・門人も多く、『平安人物志』(文化十・文政五・文政十三・天保九年版)に物産家として名が挙げられ、山本亡羊と並んで最もめざましい活動を展開した人物であるはずであるが、上野益三先生も『日本博物学史』において、「その業績の伝わらぬのが惜しまれる」と注記されているほどである。

### 一、略伝

名は広業、字は士勤、通称源之進、皓山はその号、また観生堂と号した。弘化三年二月一日、享年七十歳で死去し